鑓見内に昔市右エ門という富農がおり、仁政を敷いて人望を一身に集めていた。この家の一人娘に、それはそれは美しいおせいという一人娘がおり、絵紙のおせいといい道行く人々も必ず振り返ってみるほどだった。その上気立てがやさしく親孝行だったので皆おせいに好感をもち、若い男の人たちはみんなおせいの婿になりたいものだと念願していた。

香り高くほころんだ一輪の花も開く日を待たず散らなければならない日が来た。おせいは急に重い病気にかかり、日増しに悪化し時間を待つだけとなってしまった。集まった村の人々も惜しみ、悲しんだ。

そのとき父市右エ門は涙ながらにこの世の名残りに何か言うことがないかと尋ねた。おせいは美しい唇の間からかすかに「私はいつまでも、この美しさと幸せを保ち続けたい、私が死んだら人通りの多い道路のわきに葬ってもらいたい」といって息をひきとった。

それでおせいは幕林八十八番の東西南北に通ずる往還道路十文字に埋められ、死んでも長く村の人々の話として伝えられた。今は道路も全く変わり、すっかり寂しい墓地に変わっているが、それでも「オセイ墓」を知らない人がないほどである。